

女性雑誌にみる弘田龍太郎の音楽観

大地 宏子*

Hirota Ryutaro's View of Music as Seen in Women's Magazines

OCHI Hiroko

要 約

童謡作曲家として知られる弘田龍太郎は、数多くの楽曲をさまざまな雑誌に発表している。最もよく知られる童謡の多くは少女雑誌に発表されたが、彼は楽曲のみならず相当数の論稿も雑誌に残している。本稿では戦前の女性雑誌に掲載された弘田の著作を通して、彼の音楽観を考察した。弘田の著作が集中して発表された1920年前後の大正期から昭和初期は、大都市を中心に新中間層が生まれた時代と重なり、彼の著作の多くを掲載した女性雑誌はこの新中間層を主な読者層としていた。そのため彼の著作は彼女たちを啓蒙する意図を持っていたとも考えられる。家庭音楽に満ちたあふれた西洋と、音楽をたしなまない日本を対置する論法は、当時の音楽界にしばしば見られるものであったが、典型的な大正教養主義者の弘田が主張したのは、西洋音楽を娯楽としてではなく「教養」として身につけることで、彼の音楽観は新中間層の教養主義的な西洋音楽崇拝と深く結びついていた。

キーワード：弘田龍太郎、女性雑誌、新中間層、家庭音楽、和洋折衷

はじめに

多くの童謡を作った作曲家、弘田龍太郎（1892-1952年）は、とりわけ『赤い鳥』と結びつけられて言及されることが多いが、実は『赤い鳥』に掲載した楽曲は6曲にとどまり、しかも掲載曲はあまり知名度がない。彼の有名な童謡「靴が鳴る」「浜千鳥」「叱られて」等は、主に女学生を読者層とする少女雑誌『少女號』に発表されていたのである。しかもこの他に児童雑誌、幼年雑誌、少年雑誌、女性雑誌などに発表した楽曲が少なくとも80曲以上ある。さらに重要なのは、弘田はこれらの雑誌に楽曲だけでなく論考も寄せており、作曲技法などの音楽講座連載からエッセー風の軽い読みものまで、雑誌上に掲載した論考は全部で50余り存在していること

である。

本稿が扱うのはそのうち、戦前の女性雑誌（婦人雑誌と少女雑誌）に掲載された弘田の著作で、これらは1920年前後の大正期から昭和初期に集中して発表されたものである。これは第一次世界大戦後に大都市へ流入した人々を中心に新中間層が生まれ、また雑誌界においては大衆雑誌の相次ぐ創刊により、大衆の読者層と新中間層以上の中上流階級のそれが二分されるようになった時代でもあった。この時代の女性雑誌は、それぞれ想定する読者層によって編集内容の差異化を図ったため、本稿で取り上げる弘田の著作もまた、掲載された女性雑誌の性格（＝読者層）を強く意識したうえで、特定の読者を啓蒙する意図を持っていたとも考えられる。本論はまず当該の女性雑誌の性格や読者層を検証し、そのうえで、そこに発表された弘田の著作を分析することで、彼の音楽観を読み解こうとするものである。

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

1. 女性雑誌についての概論

近年、戦前の女性雑誌に関する研究は、社会学や女性史の立場から相当数の蓄積がなされてきた¹⁾。女性教育の歴史を考察するうえでもそれは重要な対象であり、女性雑誌自体が女性教育とともに発展してきたといっても過言ではない。なぜなら、女性雑誌の「読者層は、何よりも文字を読む識字力をもつことと、買うことが出来る経済的余裕、それに、雑誌への関心があることが必要で、中産階層以上の家庭がその基盤」であり、「識字力は、まず、学校教育の成立によって進められる」からである²⁾。

1872（明治5）年、日本で最初の近代的な学校教育制度として発布された「学制」は、女子と男子は等しく教育を授受する教育法令ではあったものの、女子の小学校就学率は明治の中頃まで男子の半分未満の低迷が続いていた³⁾。しかし1899（明治32）年、中学校令改正と高等女学校令の公布によって中等教育における男女それぞれの別学体制が整ったことで、女子教育は転機を迎える。その後、女子の小学校就学率は急速に伸び、日露戦争（1904～05〔明治37～38〕年）が終わる頃には90%を超え、男子の就学率（98%強）にほぼ近づくまでになる⁴⁾。また、高等女学校令で各県最低一校の高等女学校の設置が示されたことにより、高等女学校とその生徒数も徐々に増加し始め、1926（大正15）年には高等女学校入学者数が中学校のそれを上回るようになった⁵⁾。ただし、女子の中等教育は修業年限、学科内容ともに男子中等教育より低い段階におしとどめられたうえ、その教育理念は国策としての「良妻賢母主義」であった⁶⁾。

こうした女子教育の普及が識字力（ひいては読書力）向上に反映されたのは確かであろうが、もちろん識字力増加がそのまま雑誌購読者数に結びついたわけではない。雑誌を「買うことが出来る経済的余裕」の点を考慮すると、読者層はある程度限定されるからである。当時の女性読者層と購読雑誌の関係を示す資料として、近代日本における雑誌の受容史を描いた永嶺重敏の『雑誌と読者の近代』があるが、その中に大正中期から昭和初期にかけて東京、大阪等（主として都市部）の地方自治体が実施した社会調査をもとに作成された「戦前の女性読書調査」が

ある⁷⁾。この女性読者調査の主たる対象は「女工」と「職業婦人」（彼女らはともに大多数が10代、20代の未婚者）、そして「女学生」であり、大正期以降急速に活発化した女性の社会的進出の象徴だった教師、事務員、タイピスト、看護婦、店員など知的労働に従事する「職業婦人」に対し、肉体労働を特徴とする女工が「労働婦人」として区別されている（婦人雑誌の最大の読者である主婦層は、私的領域に閉じこめられ調査対象となる機会がなかったためか、本調査には含まれていない）。三者の階層（出自）と教育レベルの傾向、および彼女らの全国人口規模について、永嶺の論旨を整理すると、以下のようになる（なお、以下に記す「下層（民）」という表記は永嶺による）。

女工：農村や都市下層出身者／尋常小学校卒業程度の低学歴／約100万人内外

職業婦人：都市中産層／高等小学校や高等女学校卒業程度の中等学歴／約60～70万人

女学生：職業婦人の予備軍、または都市中産層の主婦層の予備軍／15～30万人

女工と職業婦人の読書率を（永嶺の算出した平均値で）比較すると、女工は新聞が全体の調査数の39%、雑誌が20%であるのに対し、職業婦人は新聞が85%、雑誌が75%で、職業婦人の読書率は女工より総じて二～三倍高い。

また彼女らの具体的な雑誌購読状況の一端は表1のとおりである（永嶺の資料⁸⁾をもとに、弘田の著作の多くが女性雑誌に掲載されていた1916年から1926年頃を中心に、できるかぎり異なる調査地を抜粋して筆者が作成し直した）。この表からは、弘田の著作が掲載されていた女性雑誌が職業婦人たちを中心に購読されていたことがわかる（表中、下線を引いた弘田の著作掲載雑誌に注目すると、女工よりも職業婦人の購読する雑誌の上位を占めている傾向が見られる）。また、東京以外の調査地でも東京と同じような購読状況が見られることから、東京をはじめ都市部においても都市中産階級（いわゆる新中間層）の文化が新たに形成されつつあったことが推察できよう⁹⁾。

ここで、女性雑誌の変遷と読者層との関係について概観しておこう。1877（明治10）年に最初の婦人雑誌『子育ての草子』が刊行されてから、1912（明

表 1 雑誌購読状況

属性	女 工							職 業 婦 人							女 学 生																
	④	⑧	⑨	⑥	⑫	①	⑩	③	②	⑤	⑦	⑪	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰														
調査年	大正 8 年	大正 8 年	大正 9 年	大正 10 年	昭和 3 年	昭和 3 年	昭和 7 年	大正 11 年	大正 13 年	大正 15 年	大正 15 年	昭和 5 年	昭和 6 年	大正 3 年頃	昭和 7 年頃	昭和 7 年頃															
調査地	東京府	東京府	上州新町	東京府	宮崎県	神戸市	沼津	東京市	名古屋市	広島市	京都府	大阪市	東京府	東京	東京	秋田・本荘市															
調査事項	(読物)	(読物)		(購読雑誌)	(購読書籍)	「好読小説誌名」	「毎月読む雑誌」	(購読雑誌)	「平素愛読する雑誌」	「平素好きな読物」	「読物(雑誌は)」	「よみものの権柄」	「読む雑誌」	(何んな雑誌を読む手)	(読む雑誌)	(購読雑誌)															
調査人数	2,350	631	840 余	1,323	4,543	3,846	80	900	1,190	800	2,048	1,949	5,779	90	1,060	322															
購読雑誌(人)	婦人世界	101	少女の友	37	婦人世界	201	泉の花	1,086	キング	169	健康	32	婦人公論	196	主婦の友	268	(婦人雑誌)	154	婦人世界	471	(婦人雑誌)	204	婦人倶楽部	1200	少女世界	49	少女倶楽部	512	キング	107	
	婦人世界	66	婦人世界	43	講談倶楽部	26	婦人世界	507	婦人世界	50	婦人世界	16	婦人世界	181	婦人世界	256	婦人世界	68	主婦の友	179	主婦の友	92	少女倶楽部	1100	婦人世界	42	少女の友	212	主婦の友	42	
	少女の友	40	赤い鳥	42	婦人世界	9	婦人世界	376	婦人世界	43	婦人世界	9	主婦の友	144	主婦の友	98	(雑誌)	55	キング	135	主婦の友	91	キング	793	少女の友	38	少女画報	154	婦人クラブ	40	
	少女世界	17	講談雑誌	42	講談雑誌	9	少女世界	228	(小説)	20	少女倶楽部	9	婦人世界	86	婦人世界	94	主婦の友	44	主婦の友	121	(雑誌)	83	主婦の友	747	少女世界	22	少年倶楽部	148	家庭	19	
	少女世界	7	少女世界	28	面白倶楽部	7	少女の友	172	少女倶楽部	18	主婦の友	7	少女世界	49	婦人世界	90	キング	23	婦人公論	117	婦人倶楽部	69	婦人公論	554	女子文壇	13	令女界	132	婦人公論	13	
	婦人世界	7	婦人世界	13	家庭雑誌	27	少女倶楽部	156	婦人世界	16	処女	6	婦人世界	32	女性	85	婦人公論	19	令女界	97	キング	68	婦人世界	405	実業之日本	9	少女世界	108	家の光	11	
	少女世界	5	少女世界	12	少女世界	24	婦人世界	147	婦人世界	14	キング	6	女性	32	(婦人雑誌)	69	婦人倶楽部	14	婦人世界	90	(種々)	38	少女の友	249	冒険世界	8	キング	108	婦人世界	9	
	婦人画報	5	少女画報	11	主婦の友	13	婦人世界	141	(購読)	14	(文学全集)	13	女の力	2	希望	54	希望	12	少女倶楽部	85	婦人世界	22	令女界	176	婦人世界	8	婦人倶楽部	92	改造	8	
	淑女画報	5	婦人界	9	うきよ	1	婦人公論	10	(以下不明)	10	(文芸全集)	13	7	2	希望	23	少女倶楽部	11	少女画報	73	婦人公論	21	婦人世界	157	少女世界	7	幼年倶楽部	88	現代	8	
	少女画報	5	少女世界	6	女の世界	1	其他	181	講談倶楽部	7	講談倶楽部	7	婦人世界	1	婦人世界	20	教育雑誌	29	婦人世界	65	富士	9	富士	79	日本少年	5	新青年	80	雄弁	7	
	演芸倶楽部	4	花形	1	婦人公論	1			(映画本)	7	富士	1	少女画報	16	家庭雑誌	27	少女画報	9	少女世界	56	令女界	9	少女世界	69	婦人の鑑	4	子供の科学	70	婦人世界	7	
	新小説	2	婦人公論	1					富士	5	(新聞)	1	女性改造	15	希望	23	(教育雑誌)	9	婦人世界	36	講談雑誌	8	少女画報	42	少年世界	3	婦人公論	64	中央公論	6	
	処女界	1			少女の友	4	(天国新聞)	1	改造	13	キング	22	女性	13	改造	22	女性	8	若草	22	少女倶楽部	7	講談倶楽部	26	家庭	3	婦人世界	61	(以下不明)		
	婦人世界	1			令女界	3	(ありません)	1	家庭雑誌	12	少女世界	15	婦人の国	12	少女世界	15	婦人の国	6	希望	21	婦人世界	4	若草	24	中央公論	2	主婦の友	56			
	婦人公論	1			少年倶楽部	3	(白紙)	6	少女の友	10	少女画報	5	(仏教もの)	9	少女の友	19	少女の友	4	改造	19	少女の友	4	改造	15	少年	2	若草	50			
新家庭	1				教育研究	9	少女世界	13	向上の婦人	4	文藝春秋	18	婦人世界	3	婦人サロ	11	探検世界	2	文藝春秋	46											
幼年の友	1				令女界	9	少女世界	11	少女世界	4	向上の婦人	14	少女世界	9	婦人世界	10	少女世界	4	向上の婦人	14	(キヌマ雑誌)	3	新青年	11	幼年の友	2	野球界	38			
蚕糸会報	1				女性日本人	9	少女の友	10	令女界	4	希	14	令女界	9	少女の友	10	令女界	4	婦人の国	13	文藝春秋	57	朝日	11	文章世界	2	女人芸術	28			
					教育雑誌	8	現代	9	(以下略)	8	婦人の国	13	教育雑誌	8	現代	9	(以下略)	9	婦人の国	10	(以下略)	10	文藝春秋	10	(以下略)	21	面白い理科	21			
					新小説	7	講談雑誌	8		7	サンデー毎日	11	新小説	7	講談雑誌	8	サンデー毎日	11	サンデー毎日	11	希望	9	希望	9	文学時代	20	文学時代	20			
					少女世界	7	(種々)	8		7	講談倶楽部	8	少女世界	7	(種々)	8	講談倶楽部	8	講談倶楽部	8	婦人世界	8	婦人世界	8	改造	19	子供の国	19			
					婦人画報	6	文章倶楽部	7		6	文章倶楽部	7	婦人画報	6	文章倶楽部	7	文章倶楽部	7	文章倶楽部	7	中央公論	7	中央公論	7	子供の国	19	子供の国	19			
					淑女画報	5	婦人新報	6		5	週間朝日	7	淑女画報	5	婦人新報	6	週間朝日	7	週間朝日	7	現在	7	現在	7	映画と演芸	19	映画と演芸	19			
					文章倶楽部	5	教育研究	6		5	少女文芸	6	文章倶楽部	5	教育研究	6	少女文芸	6	少女文芸	6	文学時代	6	文学時代	6	富士	18	富士	18			
					母之友	5	(以下略)			5	少女の国	6	母之友	5	(以下略)		少女の国	6	少女の国	6	(以下略)		(以下略)		婦人画報	18	婦人画報	18			
					(以下略)				(以下略)				(以下略)				少女の国	6	少女の国	6	(以下略)		(以下略)		明るい家	17	明るい家	17			
																								(以下略)	238	(以下略)	237	(以下略)	237	(以下略)	(1,157)
計	270	292	101	722	(2813)	397	101	1,184	1,436	472	1,965	792	5,879	238	2,327	(1,157)															

(調査対象) 女工：④東京府の製糸女工 ⑤東京府下の諸工場の女工 ⑥宮城県下の製糸女工 ⑦神戸市のマッツイ工業従事女工 ⑧総同盟紡績沼津支部の組合員女工

職業婦人：⑨東京市内の職業婦人 ⑩名古屋市内の職業婦人 ⑪京都市内の職業婦人 ⑫大阪市内のカフェー・女給 ⑬東京府の百貨店就職希望女学生

女学生：⑭東京の某高等女学生 ⑮東京府立第三高等女学生 ⑯秋田県立本荘高等女学生

治45)年までの36年間に、婦人を対象とした雑誌はおよそ160種発行された¹⁰⁾。黎明期を経て婦人雑誌が本格的に軌道に乗る契機となったのは、1899(明治32)年の高等女学校令の公布である。これは良妻賢母の理想を強く謳ったものであったが(当時の菊池大麓文部大臣もそれを奨励した)、これをきっかけとして「都市小家族を対象とし、又初等、中等教育の普及による識字層の増大=大量読者層の獲得を目指して、さまざまな商業的婦人雑誌が発行された」¹¹⁾のである。こうして発刊された代表的な婦人雑誌としては、『女学世界』(博文館 1901[明治34]年)、『婦人界』(金港堂 1902[明治35]年)、『婦人画報』(近事画報社 1905[明治38]年)、『婦人世界』¹²⁾(実業之日本社 1906[明治39]年)、『婦人くらぶ』(紫明社 1908[明治41]年)、『婦女界』(同文館 1910[明治43]年)などがある。編集方針は各誌とも似たような「良妻賢母主義をもちこんだ啓蒙的記事、実用的家庭記事、文芸、グラビア等で構成」¹³⁾されていたという。一方、明治末期には日露戦争後から始まる東京など大都市への人口流入と「家庭改良論」の流行とともに、都市小家族の中から形成される中等家庭を対象に、合理的な新しい生活のあり方を提起する家庭雑誌も数多く誕生した(第2章で詳述)。

これら家庭の主婦を中心とする大人の女性を対象とする「婦人雑誌」に対して、高等女学校(13～16、7歳)卒業時くらいまでの少女を対象とするのが「少女雑誌」である¹⁴⁾。これらの雑誌も婦人雑誌同様、高等女学校令の公布以降、1902(明治35)年に創刊された『少女界』(金港堂書籍)を嚆矢とし、明治末期にかけて次々と刊行された。代表的な少女雑誌を挙げると、『日本の少女』『少女智識画報』(1906年)、『少女世界』(1907年)、『少女の友』(1908年)、『少女』(1910年)、『少女畫報』(1913[大正2]年)、『少女號』(1916[大正5]年)、『少女俱樂部』(1923[大正12]年)などで、弘田は後者の三誌に作品を発表している。

日露戦争後から第一次世界大戦前後の大都市への人口増加に伴い、大正中期以降(1920～1930年代)に「新中間層」という階層が形成されたことはよく知られている。「官公吏、教員、会社員、職業軍人などの近代化とともに生まれ、学校教育を媒介とし

て獲得された近代職業」¹⁵⁾に就いた俸給生活者たる彼らは、教育や文化を軸に新しい生活様式を営む近代(核)家族を作り、大都市郊外の特定の区域に居住した。女性雑誌はこうした中間層文化と深く結びつきながら、大正期の末頃から徐々に大衆化していく。

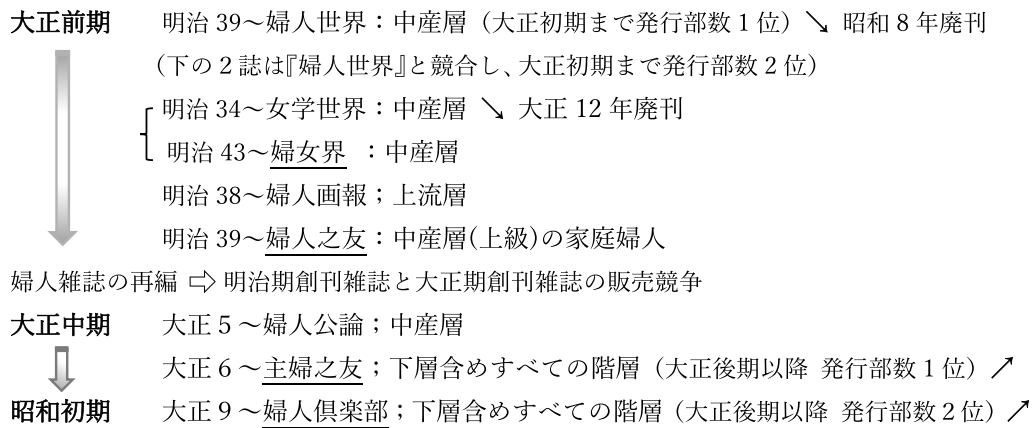
こうした大正後期から昭和にかけての時代は、女工等のリテラシーの急速な上昇により、当初都市中産階級の文化圏に属する女性たちの間で普及した婦人雑誌の購読習慣が、下層の大衆層へ波及していった時期である¹⁶⁾。婦人雑誌界は大正中期を境に勢力図が一変し、激しい再編過程が始まったという。すなわち、大正中期に相次いで創刊された有力三誌、『婦人公論』(1916年)、『主婦之友』(1917[大正6]年)、『婦人俱樂部』(1920[大正9]年;前述の『婦人くらぶ』とは別雑誌)の伸張によって(これら三誌に明治期の『婦人画報』[1905年]を加え、「戦前の四大婦人雑誌」と呼ぶ)、明治期創刊の婦人雑誌群は次第に販売部数を後退させていった。とりわけ『主婦之友』と『婦人俱樂部』の躍進は目ざましく、「それまで雑誌市場にあまり登場してこなかった新中間層の中・下層(たとえば、下級官公吏、巡査、小学校教員など)の主婦たちや、農家や商業の女性たち、あるいはその予備軍の女性たちを読者層として想定し、彼女らの需要に応じた記事を掲載した」¹⁷⁾のが成功の原因だったという。表2は本章で挙げた婦人雑誌群と表1に見られる代表的な雑誌の1927(昭和2)年における発行部数を示したもので、

表2 1927(昭和2)年 雑誌の発行部数
『新聞雑誌社特秘調査』*「雑誌ノ部」より抜粋して作成

婦人雑誌	発行部数(部)	その他の雑誌	発行部数(部)
主婦之友	20万	キング	30万
婦女界	15万5千	改造	10万
婦人俱樂部	12万	講談俱樂部	9万
婦人世界	8万	文藝春秋	7万
婦人之友	6万	中央公論	2万
婦人画報	3万		
婦人公論	2万5千		
(女性)	2万5千		

*『新聞雑誌社特秘調査』大正出版、1979年、「雑誌ノ部」21-27頁
『新聞雑誌社特秘調査 昭和二年・警保局』原本=新聞雑誌及通信社二關スル調

図1 婦人雑誌の盛衰と読者層（弘田の著作掲載雑誌には下線）



ここからも『主婦之友』がいかに多く読まれたかがわかる。

こうした婦人雑誌の大衆化の進行により、それとの差異づけをはかるべく特定の読者ターゲットへとシフトする動きもあらわれ、婦人雑誌は大衆指向型と選良指向型の二種に分化された。つまり、どの階層の女性にも幅広く読まれていたのが『主婦之友』と『婦人倶楽部』だったのに対して、上流社会に読者層をもつとされる『婦人画報』や上・中産層の家庭婦人に読者をもつ『婦人之友』、また職業婦人に多く読まれた『婦人公論』などは、読者を絞った雑誌だったのである（ただし、職業婦人や女学生等の知的エリート階層においては、表1が示すように、知識人型婦人雑誌に加えて大衆型婦人雑誌を併読して読まれることが多かったようだ）。以上、本章で明治期末から大正期の雑誌改編を経て昭和初期にいたる女性雑誌の盛衰と主たる読者層を図示すると、図1のように整理することができるだろう。

2. 弘田の家庭音楽観

弘田の曲ならびに著作が掲載された女性雑誌は、『婦人之友』『婦人倶楽部』『主婦之友』『婦女界』の婦人雑誌と、『少女號』『少女倶楽部』『少女畫報』の少女雑誌で、その一覧を表3にまとめた（少女雑誌には楽曲提供がほとんどで、『少女號』と『少女畫報』に論考が各1本ある¹⁸⁾）。そのうち弘田がまとめた論考を発表したのは『婦人之友』への4本で、他の婦人雑誌に比べ提供した楽曲も最も多い。『婦人之友』は、「読者層を上級官吏、高級サラリーマン、大学教授などの新中間層の上層部分の主婦に

想定して編集された雑誌であった¹⁹⁾が、弘田はこうした読者層を想定していたと考えてよいであろう。

明治期は近代的な性別役割分業による家族が形成され、女性は女子教育においても良妻賢母であることが啓蒙されたことは前章で述べたとおりであるが、やがて「主婦」や「家庭」ということばが明治20年代頃から現われ、「家庭改良論」の流行とともに、「家庭」の名を冠した雑誌が明治後期から数多く発行される。なかでも『家庭之友』（1903〔明治36〕年創刊）や『婦人之友』（1906〔明治39〕年創刊）は最も読まれた代表的な家庭雑誌で、主婦主導の合理的で科学的、かつ実用的な家事・育児についての家庭（家政）論を説きつつ、「円満な家庭」「家庭の和楽」「一家団欒」という語彙を掲げ望ましい家庭の営みを啓蒙していた。こうした新しい家庭を実践していくのが第一次世界大戦後に出現した新中間層であり、まさしく『婦人之友』の読者層であった。

こうした「家庭」概念の広まりとともに、「家庭の和楽」や「一家団欒」の手段の一つとしてクローズアップされてくるのが、「家庭音楽Hausmusik」である。これはもともと十九世紀ドイツ市民社会でよく使われた言葉で、交響曲や協奏曲やヴィルトゥオーソ曲のような「演奏会音楽」の反対語として、連弾や弦楽四重奏やリートを指していた。ただし「家庭音楽」は、第一次大戦後の日本においては、本来のこうした意味とは少し異なるニュアンスとともに導入されたようである。「家庭音楽論は20世紀初頭に女子教育の先駆者たちによって唱えられ、1910年頃に音楽の家庭への普及を願う音楽関係者に引き継がれ²⁰⁾、1910年代を中心に20年代末頃まで、日

表3 弘田龍太郎 女性雑誌掲載の著作一覧

(※表中のグレー部分は論考)

【少女雑誌】

【婦人雑誌】

雑誌名	論考／楽曲	発行年	巻号	論題／楽曲名(作詞者)	雑誌名	論考／楽曲	発行年	巻号	論題／楽曲名(作詞者)	
少女號	童謡	1919	4(9)	お山のお猿(鹿島鳴秋)	婦人之友	家庭の歌	1916	10(2)	湯殿の梅(河井醉茗)	
	童謡	1919	4(11)	靴が鳴る(清水かつら)		家庭の歌	1916	10(4)	春より夏へ(與謝野晶子)	
	童謡	1920	5(1)	濱千鳥(鹿島鳴秋)		家庭の歌	1916	10(8)	温泉の道(尾上柴舟)	
	童謡	1920	5(2)	椿のお家(清水かつら)		家庭の歌	1916	10(11)	夕焼を見る兒(窪田空穂)	
	童謡	1920	5(4)	叱られて(清水かつら)		小曲	1921	15(1)	三日月(西條八十)	
	童謡	1920	5(6)	あした(清水かつら)		小曲	1921	15(3)	櫻のかげに(高安月郊)	
	童謡	1920	5(8)	ひぐらし(清水かつら)		小曲	1921	15(5)	寺の庭(室生犀星)	
	少女小曲	1920	5(12)	落葉の踊(鹿島鳴秋)		小曲	1921	15(6)	夏の河岸(川路柳虹)	
	少女曲譜	1921	6(2)	濱の少女(鹿島鳴秋)		論考	1921	15(7)	家庭と音楽趣味	
	童謡	1921	6(3)	かげゑ(清水かつら)		小曲	1921	15(11)	蓬のにはひ(蒲原有明)	
	童謡	1921	6(7)	開かぬ扉(清水かつら)		論考	1922	16(5)	民衆の求むる眞の音楽	
	少女小曲	1921	6(9)	仔犬の夢(鹿島鳴秋)		論考	1924	18(6)	音楽を聴く悦び	
	童謡	1921	6(11)	村祭り(鹿島鳴秋)		論考	1926	20(3)	子供に音楽を習はせるには器楽について	
	少女小曲	1922	7(1)	梅月夜(鹿島鳴秋)	婦人倶楽部	エッセー	1924	5(9)	戀に落ちた娘に對する親の心得	
	童謡	1922	7(2)	雀の学校(清水かつら)		民謡	1925	6(9)	小雨(薄田泣菫)	
	童謡	1922	7(4)	お家忘れて(鹿島鳴秋)		童謡	1926	7(4)	びよびよひよこ(濱田廣介)	
	「童謡音楽號」→	童謡対話	1922	〃	人形の行方(清水かつら)	主婦之友	童謡	1925	9(10)	おちいさん(西條八十)
		論考	1922	〃	私の作曲した童謡について		懸賞當選子守唄	1925	9(12)	子守唄
		少女小曲	1922	7(7)	柳むすめ(鹿島鳴秋)		懸賞當選子守唄	1926	10(1)	母子草
		童謡	1922	7(11)	七つのお祝ひ(清水かつら)		懸賞當選子守唄	1926	10(2)	子守唄
童謡踊		1922	〃	朝の雪道(清水かつら)	懸賞當選子守唄		1926	10(3)	子守唄	
童謡踊		1922	7(12)	忘れもの(鹿島鳴秋)	抒情小曲		1926	10(7)	螢(宮崎孝政)	
少女小曲		1923	8(2)	雪はちらちら(鹿島鳴秋)	婦女界	童謡	1925	32(6)	親子鳩(濱田廣介)	
少女俱樂部		童謡	1924	2(11)		烏の學校(野口雨情)	童謡	1926	33(1)	正月元旦(濱田廣介)
		童謡	1925	3(7)		嵐の跡(落谷虹児)	童謡	1926	33(2)	鶯の雀(濱田廣介)
		童謡	1925	3(8)	田舎家の夏(川路柳虹)					
	童謡	1932	10(3)	吹けよ春風(加藤まさを)						
少女畫報	歌曲	1926	15(3)	ひかりの鳥(富原義徳)						
	論考	1926	15(3)	音楽の聴き方						

露戦争後に創刊された数誌の音楽専門雑誌をはじめ家庭雑誌においても「家庭音楽」をめぐる議論が繰り返し掲載された²¹⁾。そして、家庭音楽の目的は「一家団欒、和気溢るゝの中に優美高尚なる趣味を得しめんが爲めなるべし」²²⁾とされ、家庭音楽は「一家団欒」とセットで語られ理想化されたのである。

ここで最初に取り上げる弘田の論考は「家庭と音楽趣味」(『婦人之友』7月号、1921〔大正10〕年、45-48頁)である。この論考は次のように始まる。

凡てに於て^①趣味と云ふものが家庭を和合させる點、及び家庭の根柢を強く引きしめる上に於て決して少くはない力を有して居ることは申す

までもありません。さて家庭に何等か趣味が必要であるとなるならば、〔中略〕むしろ藝術的なものが一番ふさはしいと思ひます。而もその藝術の中でも我田引水的ではありますが、^②家庭の趣味として音楽をおすゝめしたいと存じます。第一音楽には一同が同時に楽しみ、一つの心持に同化せしめねば止まぬと云ふ非常に力強い勢力があるので、之が非常な効果をもたらします。〔中略〕又ピアノやヴァイオリン、オルガン等を買ふのもよく、教師について習へば尚更趣味を深くし、従つて効果も多くなるわけです。^③西洋の家庭では家庭の趣味としては先づ第一に音楽と云ふわけで、多くの家庭には

ピアノが備へられ、夕食後の一時間は家内中が音楽の爲めに費やす事が多いとき、及んで居ます。尤もな事と思つて居ます（下線筆者）²³⁾。

ここで注目したいのは下線を引いた三箇所である。まず①「家庭を和合させるために家族共通の趣味として芸術的な音楽を取り入れましょう」という趣旨は、当時の家庭雑誌がなべて標榜していた「家庭の和楽」と完全に重なるものである。弘田は『婦人之友』に楽曲も提供しているが、「家庭の歌」と名付けられたものがいくつか見られる（表3参照）。おそらく主婦（か娘）がピアノ伴奏を弾き、家族で歌うための一家団欒用に作曲されたものだったのだろう。

また、②「家族の趣味として芸術的な音楽を取り入れること」、すなわち「趣味としての家庭音楽」を推奨している点も注目される。ジャーナリズムと家庭音楽は一種の「共犯関係」にあったとみる細川周平によれば、「よい趣味」がステータスにつながるという発想が生まれた時期と、家庭音楽という概念の隆盛が一致しているのは偶然ではないという。つまり、「よい趣味」＝「よいたしなみ」をもつことは、それを実現する文化資本をもつことであることを意味し、それは経済や身分や性差による社交圏の確立と関係しているということである²⁴⁾。「家庭音楽」に関する論考を『音楽界』に最も多く寄稿した音楽教育家の山本（旧姓 堤）正夫は²⁵⁾、「定められた規律の正しい音階に依って美しい歌が運ばれる音楽程高尚な趣味の深い家庭的の娯楽が、又とありませうか」²⁶⁾と述べているが、ここにも音楽を高尚な「趣味」として印象づけようとする意図が感じられるだろう。

さらに下線③のように、西洋でいかに家庭音楽が盛んであるかを紹介する西洋崇拜的／啓蒙的な言説も、弘田に限らず当時の家庭音楽をめぐる言説の中でしばしば見られる。弘田が実際に留学先のベルリンで家庭音楽を見聞するのは、この論考を書いた6年後（1928年）のことだが、たとえば1909～10年にベルリンに滞在していた幸田延は、「彼地では大抵の家庭にピアノの在るのが當前のこと位になつて居ります」²⁷⁾として、ベルリンでは家庭音楽が盛なこと、一般の人の音楽に対する素養が高いことな

どが報告されている。

この弘田の論稿でとりわけ目を引くのは、「現今の家庭における音楽の種類」と小見出しをつけた以下の記述である。

此等〔筆者註；声楽、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、ハーモニカ、大正琴、ピアノとヴァイオリンデュオ、ヴァイオリン二部合奏、三部合奏、マンドリン合奏、マンドリンとギター合奏〕のものがすべて行はれて居るのは大都會例へば東京とか大阪とかに限るので、一度地方へ入れば小學校、女學校で習つた唱歌、ピアノ、ヴァイオリン合奏。オルガン、マンドリン、ハーモニカ、大正琴、流行歌、三味線樂、箏曲、なには節、民謡位で、ずつと田舎へ入れば、小學校で習つた唱歌、流行歌、民謡より外はないと云つてもよいのです（下線筆者）²⁸⁾。

音楽的趣味を居住地域と結びつける弘田のこうした主張は、次のような階層ヒエラルキーを前提にしていると考えてよいであろう。すなわち、新中間層ならびに上流階層が多く住む大都會がヒエラルキーの頂点に位置し、地方に住む中流家庭が続き、「田舎」が最も下に来る。そしてこうした階層ヒエラルキーはそのまま西洋音楽の浸透度に比例しているのである。つまり階層が高い家庭ほど西洋音楽を、低い家庭ほど邦楽をたしなむ傾向にあるということである。弘田の社会階層と音楽を結びつける傾向、そして邦楽に対する西洋音楽の優位性については、以降で詳しく述べる。

3. 音楽嗜好と社会階層意識と教養としての西洋音楽

弘田の論考でたびたび目にするのは、音楽を人間修養と考える教養主義であり、その場合の音楽とはほぼ西洋音楽に等しく、その際には音楽嗜好がしばしば社会階層と結びつけられる。例えば「音楽を聴く悦び」（『婦人之友』1924〔大正13〕年6月号、25-27頁）と題された論考では、芸術音楽の崇高さが言葉を尽くして讃美される一方で、それが分からない者は憐れで不幸な人だと断定される（弘田がいう「音

楽」は、「遠くに聞える美しいピアノの旋律……」とあることから考えて、邦楽ではなく西洋音楽であることは間違いない。

まず弘田は、人間の聴覚について、音楽を理解し得る耳を持つ人とそれを持たない人の二種に分け、音楽会を聴きに行ったものの理解できなかったという場合は、後者の音楽を理解しない耳に問題があり、「此の人にとっての此の音楽會は藝術的に何等の意味も與へなかつた事になる」²⁹⁾ という。そして文化的な生活に必須である音楽を嫌う人については、以下のように断罪する。

音楽を嫌ふ原因に就ては種々あるが、主として所謂聴くべき耳を持たない爲めとか、ひまな人のみの獨専すべきものであると考へる爲めとか、音楽を聴いたとて米の代りにもならなければ、金がふえるわけでもないと考へる爲めとかで、第一の人はあはれむべき者、第二の人は偏狭な誤れる考へを持つて居る者、第三に至つては人間としての存在を疑ふのである³⁰⁾。

理想主義および音楽を通した人格形成の点で、ここに典型的な大正教養主義を見ることはたやすい。「音楽を真に聴くことがいかに意味ある人生たらしめるか」、またその内容が高ければ高いほど、「私たちの生活の意味は高まる」などさまざまな美辞麗句を並べた後、「音楽を聴く悦びは誰れも持たなくてはならないものであり、持つのが自然である。持たない者は真にあはれな者で、世の不幸なる人の一人と断言することが出来る」³¹⁾ と彼は説く。

こうした音楽教養を身につける上で重要だとされるのが、幼少期からの教育である。「器樂に就いて」(『婦人之友』1926〔大正15〕年3月号、47-50頁)が掲載された号は、「子供を賢くするための號」と題されており、「子供に音楽を習はせるには」という共通テーマに寄せて、弘田は「器樂に就いて」語っている。その内容は主として子どもに器樂を習得させるための手引で、楽器購入や教師の就け方、練習時間などが細かく書かれているが、これらの前文に、音楽の演奏能力と音楽に対する常識的な知識教養を持ち合わせる必要性について、自身の体験が以下のように紹介されている。

去年の秋、アンデルセンの大會が帝國劇場で二日間に亘つて開かれた際、デンマルクの公使は非常に悦ばれて、主だつた者文を、二日目の會の終つた後で招待されました。私も其の一人として末席を汚しましたが、公使及び書記の方々も、皆歌をうたはれる、或ひはピアノを弾かれ、極めて和氣藹々たるものがありましたが、それに反して招待された日本人の多くは、單に席に待つてゐるに過ぎないで、如何にも物足らない感じがしました。最もこれは、語學の力の然らしむる所もありませうが、外國の人達の音楽に對する教養といふものは實に徹底したもので、而もそれは生活の要具であると共に、あらゆる方面に非常な効果を示し、其の爲めかゝる會合も如何にも暖い、いかにも楽しい、いかにも喜ばしい感じを與えて居ります。實際は出來ずとも、共に楽しみ共に喜ぶだけの心持は、日本人と雖も持ちたいものであります(下線筆者)³²⁾。

歌唱やピアノ演奏を常識として身につけた西欧人たちがそれらを披露し合い、互いに社交を楽しむ様子に比べ、日本人の多くはそれが不足しているために社交性にも欠けるとして、弘田は次のように続ける。

音楽の教養は一跳びに得られるものではないので、何事によらずさうでありますけれど、殊に音楽の如きシンボリックなものに對しては、相當な教養がなくては、音楽の事を語り音楽を理解する事が出來ません。教養の不足である場合には、結局語る事も出來ねば理解する事も出來ずに終りますが、世の所謂洋樂はわからぬといふ人は、多く此の教養の不足から來るので、中には稀に洋樂を聴いては其の度にわからぬといふは、之程わからぬ事はないと思ひます(傍点原著、下線筆者)³³⁾。

このように、西洋音楽を理解できない原因は「教養の不足」にあると繰り返したうえで、弘田は「教養といふ事は、一朝一夕に完成せぬもので、なるべく幼い時からするに限ります。茲に於いてお子さん方に音楽を習はせる必要が生ずる」³⁴⁾ とするのである。

また、この論考の最後においては、学業と音楽の

練習を両立できず学業が不振に陥る例について、一般的にそれは杞憂に過ぎないとしながら、次のような持論を展開する。

学業の不成績は、或ひは音楽の練習の爲めでなくて其の人の性質なり。他の理由にあるかも知れないので、これが音楽の爲めだと誤解せられる事は甚だ迷惑至極の事です。淫蕩的な、或ひは遊びに耽らせる様なものを音楽としか考へない人は、其の人自身が花柳界の音曲に、興味と中心とを置いてゐるためではありますまいか？。此の言を爲す人には、其の人自身の音楽に對する興味に就いて、反問してみたいと思ひます（下線筆者）³⁵⁾。

弘田は、学業の不振に音楽の練習が影響を与えるか否かという問題を、学業に悪影響をもたらしたのは、芸術性の高い潔癖な洋楽（西洋音楽）ではなく、淫蕩的で遊びに耽らせる花柳界の音曲ではあるまいかと、音楽ジャンルの問題としているのである。こうした花柳界の音楽や流行歌についての蔑視が、西洋音楽至上主義と対になっている点は、弘田の音楽観に極めて特徴的なものである。

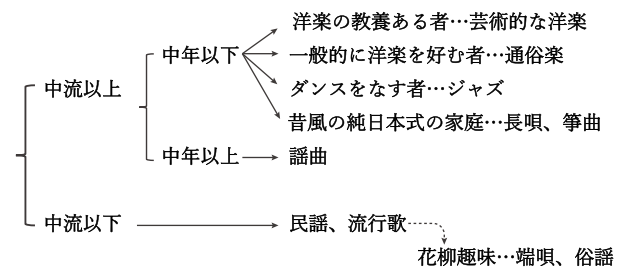
女性雑誌への寄稿でこそないが、西洋音楽以外の音楽に對する弘田の総じて極めて否定的な態度が明言されているのが、幼児向けの音楽について書かれた次の論考である。「音楽と社会」という節の中で彼は、「音楽と云へば、たゞ一種或は四五種位に考へてはならない。高い藝術的な曲もあれば、極めて低い趣味の曲もあつて、その間に種々な曲が存在する」³⁶⁾と述べた後、社会的階層と世代別に各層がたしなむ音楽の種類を以下のように区分している。

概略を云へば中流以上の家庭で洋楽の教養ある中年以下の者は藝術的な洋楽を、たゞ一般的に洋楽を好むものは通俗樂を、ダンスをなす者はジャズを好み、昔風の純日本式の家庭では長唄、箏曲等が多く行はれ、中年以上の者の間には謠曲にこることもあり、中流以下では民謠、流行歌が入り込んでゐるし、花柳趣味になると、端唄、俗謠が行はれる。而して學校には學校の音楽があり、家庭の音楽として、ジャズ及び俗謠

は不適當である³⁷⁾。

これを図示すると図2のようになるだろう。2章で引用した「現今の家庭にける音楽の種類」と同様、上層には洋楽を、「下層」には邦楽を分類し、最も芸術性の高い音楽に洋楽（西洋音楽）を位置づけている。それをたしなむのは「中流以上の中年以下で教養のある」最も上位の上流階層で、これを執筆している時46歳だった弘田自身がこの最上位の階層に属していたことは言うまでもない。そして他方、民謡や流行歌を芸術性の低い曲と見なし、花柳界の端唄や俗謠を蔑視しているのも予想の通りである。とりわけ洋楽であってもアメリカのジャズを敵視している点は興味深く、「品行方正な」西洋音楽に對して、娯楽音楽／ダンス音楽であるジャズは（花柳界の音曲と同様に）下品であり、上流家庭にはふさわしくないという理由によるものと想像される。

図2 弘田の考える家庭階級と音楽趣味



4. 「和洋折衷」の問題

ただし弘田は、邦楽全般を「低い音楽」と見なししていたわけではなかった。何より彼は、1907（明治40）年に東京音楽学校内に設立された邦楽調査掛の調査員として、延べ12年近く師の本居長世（1885-1945年）らと日本音楽の五線譜化事業などに携わっており³⁸⁾、邦楽について熟知していたのみならず、その何らかの意義を感じていたはずである。

弘田は1917（大正6）年に、母校の東京音楽学校に設置されたばかりの作曲部に再入学しているが、その頃の日本の作曲界における状況について、作曲家の小松耕輔（1884-1966年）は「大正七、八年頃は西洋音楽の方でも『作曲』ということが、ぼつぼつ始まりかけた時代で」、その頃の作曲界には三つの傾向があったと述べている。すなわち「その一つ

は、島崎赤太郎・小山作之助・山田源一郎などの、唱歌を主とする学校音楽の仕事、今一つは、山田耕筈らのような全く西洋流の仕事、そして第三は、私（小松耕輔）と弘田竜太郎と梁田貞の三人で結成した「作曲研究会」がめざしたような日本的な・民族的な傾向でした。『洋楽の作曲でも、単に西洋の模倣ではなく、将来の日本音楽は、やはり、日本的なものでなければならぬ』と、この三人は考えていた」（下線筆者）という³⁹⁾。

ちょうどこの時期、1919（大正8）年に箏曲家の宮城道雄（1894-1956年）が開いた自作の箏曲発表会は、邦楽と洋楽を融合した斬新な企画として、とりわけ洋楽家たちの間に大きな関心と呼んだ。弘田ら三人が宮城に注目したのは言うまでもなく、その後、宮城と本居らが1920（大正9）年に開催した「新日本音楽大演奏会」を機に興った新日本音楽運動に弘田も参加し、洋楽と邦楽の融合を模索することになった。弘田は自身のめざす和洋折衷の音楽について折にふれて述べている。「民衆の求むる眞の音楽」（『婦人之友』1922（大正11）年5月号、42-45頁）という論考においては、童謡と少女小曲（弘田が少女雑誌に掲載の楽曲に名付けた）の作曲法について、次のように述べられている。

共に日本の國民性を基礎として創み出された藝術であらねばならぬと思ふ。若しこれを無視して作曲されるならば、それは民衆藝術の本領を失ひ、個性を無くして、世界的藝術の偉大さはとても望むべくもないと思ふ。殊に、この勃興の機運に伴はない在來の曲を模倣し、又國民性を無視して外國の大家の曲に阿るもの、如き作曲は、遂にその生命を見出すに苦しむのである。〔中略〕

それでは國民音樂の基礎をなすものは何のであるか。〔中略〕自分の考へでは、日本固有の民謡及び俗謡の上に生長して行くべきものであると思ふ（下線筆者）⁴⁰⁾。

弘田の考える和洋折衷の音楽とは、日本固有の民謡と俗謡の上に成長していくべきものだという。しかしながら、3章で示した図2のとおり、弘田は邦楽の中でも民謡や俗謡は下位の音楽として位置づけて

いたはずである。では弘田は「低俗な」はずの民謡をどのように洋楽と折衷しようと考えたのだろうか。

弘田は民謡が漸次廃れつつあることを嘆かわしい傾向だとして、「單に外國作曲家模倣のみを事とせず、我國民性の育てた民謡の風韻を傳へ、更らに新時代の民衆の魂に端的に打込むことの出来る新曲を提供すべきではあるまいか」⁴¹⁾（下線筆者）と書いているが、しかしその具体的な作曲法については明らかにしていない。また民謡には大衆を動かす力が潜在しているため、「曲の流行は民衆を頹廢せしむるの虞れがある」として、「故に非文化的、非藝術的、餘りに淺薄な通俗音樂は、國家も民衆も共に警戒すべきであると思ふ」⁴²⁾と論を結ぶなど、一見矛盾しているとも思える主張を述べている。

まず、弘田が民謡や流行歌、（花柳界の）音曲等を下卑た音楽と考えた理由としては、当時の東京音楽学校長だった湯原元一（1863-1931年）の発言が参考になる。湯原は弘田も携わった邦楽調査掛の事業について、邦楽存続にとって最も困難を感じるのは「歌詞一即ち文句の淫猥な点である」ことを挙げているのである。すなわち、「今日家庭の音楽として一般に行はれて居る琴唄の如きも中には随分淫猥な文句が少くないが、其他長唄や義太夫などの所謂淨瑠璃物に至つては實に甚だしいものが多い。〔中略〕斯様いふやうに淫猥な文句が多くては到底健全な家庭音樂として傳へる事は難かしい」（下線筆者）ため、文句の修正改竄を免れないが、それを修正してしまうとそれに付随した音楽を破壊してしまうことになる。そこで、坪内（逍遙）博士が主張するように、現代に調和した長唄や常磐津を新作にして家庭に入れるのが善策であろう、と締めくくっている⁴³⁾。つまり問題とされたのは民謡の音楽面ではなく、「淫猥な」歌詞であり、しかし従来の民謡等の音楽はあまりにも深く歌詞と結びついているゆえに、そのまま家庭に入れるわけにはいかない、従ってこれらの欠点を改めた新作が必要だという主張である。

弘田が抱いていた和洋折衷音楽のイメージも、こうした歌詞の改善による、家庭に持ち込める音楽を新たに作るという主張だったと考えることは可能だと思われる。弘田は和洋折衷音楽についての具体的な定義や方法論を明らかにすることはなかった。しかし「西洋の楽曲の模倣ではなく、民謡の風韻を伝

える新曲」とは、端的に言えば「西洋音楽の様式をもとにしつつ、良俗にかなう歌詞を伴い、時折民謡風の味をアクセントに用いる曲」と考えるならば、弘田が実際に残した曲のスタイルとも一致すると考えられるのである。ここで思い出されるのが弘田の工場音楽のことである⁴⁴⁾。同時期の弘田は製糸工場の工場長らの依頼で、そこで働く女工たちのために「工場音楽」なるものを作曲していた。これは彼女たちが「卑猥な」小唄を歌うのをやめさせるべく、より「健全な」歌詞による歌を作るよう頼まれたことがきっかけであった。つまりここでも問題とされたのは「淫猥な」歌詞だったのである。

おわりに

本論では女性雑誌に掲載された弘田龍太郎の論考を通して彼の音楽観を考察した。弘田は西洋を範として、家庭でピアノやヴァイオリンをたしなみ、「いい趣味」をもつことを推奨した。家庭音楽に満ちあふれた「優れた西洋」と、音楽をたしなまない「遅れた日本」を対置する論法は、当時の音楽界にしばしば見られるものであったが、とりわけ弘田がこだわったのは、西洋音楽を娯楽としてではなく「教養」として身につけることであった。その意味で弘田は典型的な大正教養主義者であった。

周知のように大正教養主義の中核を担ったいわゆる新中間層は、大都市郊外の特定の区域に居住するようになり、東京近郊では成城がその代表であったわけだが、弘田自身もまた多くの新中間層家族の憧れだったこの高級住宅街に居を構え、後にこの成城でゆかり文化幼稚園を創設することになる(1947年)。園を設計したのは同じく成城に住む大建築家の丹下健三であり、創設にあたっては倉橋惣三らの協力も得たという。ちなみに成城に移り住んだ文化人は他に、平塚らいてう、武者小路実篤、北原白秋、柳田國男、横溝正史らがあり、音楽評論家の吉田秀和は旧成城高校に通っていた。弘田の音楽／音楽観は新中間層の教養主義的な西洋音楽崇拝と深く結びついていて、それを象徴するのが成城文化だったとも考えられるのである。

付記

本研究は、2019年度科研費 基盤研究 (C) JP19K00142の助成を受けたものです。

註釈

- 1) 近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社、1989年／本田和子『女学生の系譜—彩色される明治』青土社、1990年／坂本佳鶴恵「女性雑誌にみる『女の子』の成立—少女文化から女の子文化へ—」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第54巻、2001年、149-158頁／今田絵里香『「少女」の社会史』勁草書房、2007年／玉川裕子『「ピアノを弾く女性」というジェンダー表象—近代日本の場合—』『ジェンダーと表現—女性に対する暴力を無くすためのもうひとつの視点からの試み—』[2007年度フェリス女学院大学 学内共同研究報告書] 2008年、23-36頁／歌川光一『女子のたしなみと日本近代—音楽文化にみる「趣味」の受容』勁草書房、2019年など。
- 2) 中畠邦「近代日本における婦人雑誌、その周辺—『婦人雑誌の夜明け』によせて—」近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社、1989年、4頁。
- 3) 学制が公布された翌年の女子の小学校就学率は15.14% (男子は39.90%)、その後教育令により小学校以外の男女の共学が禁止された1879 (明治12) 年の女子のそれは22.59% (男子は58.21%) だった。(文部省『日本の成長と教育—教育の展開と経済の発達』帝国地方行政学会、1962年、180頁)
- 4) 同前。
- 5) 文部科学省編『2001 我が国の教育統計—明治・大正・昭和・平成—』財務省印刷局、5-6頁。
- 6) 三鬼浩子「明治婦人雑誌の軌跡」近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社、1989年、50-51頁参照。
- 7) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年、157-202 (第五章) 参照。
- 8) 前掲 註7) 永嶺、174-179頁の表5▶6を参照。
- 9) 永嶺の資料には他に、大正末期に東京市と大阪市で実施された細民地区に居住する男女を含めた都市下層民の読書調査も掲載されており、ここに居住する女性の文盲率は55～64%で読書率は1割にも満たず、婦人雑誌を購読することは皆無に近かったことが報告されている。(前掲 註9) 永嶺、165-166頁参照)
- 10) 前掲 註6) 三鬼、4頁。
- 11) 同前、54頁。

- 12) 『婦人世界』の広告面には、「本誌は全国女学校の教育方針に依りて編輯す」「全国女学校教員間に最も評判好きは本誌也」と、高等女学校文化圏への立脚が明確にうたわれていることから、明治期の雑誌は職業婦人・女学生や都市中産家庭の主婦を読者の中心に想定していたことがわかる。(前掲 註7)永嶺、181頁)
- 13) 前掲 註6) 三鬼、56頁。
- 14) 前掲 註1) 坂本、149-150頁。ちなみに本田和子の分析によると、「少女雑誌」の読者対象となる「少女」とは、一部の女性のモラトリアム期にあった「女学生」らによって、虚構として誕生したことばの産物だったという。すなわち、彼女たちが雑誌への投稿という手段を通じて積極的に誌面に参入し、誌上を私的なコミュニケーションの場に変貌させたことで、「少女」という虚構集団を形成したのだとする。(本田和子『子どもの領域から』人文書院、1983年、229頁、同『女学生の系譜—彩色される明治』青土社、1990年、186-196頁参照)
- 15) 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999年、39頁。
- 16) 前掲 註7) 永嶺、181頁参照。
- 17) 前掲 註15) 小山、46頁。
- 18) いずれも読者層の少女らに向けた論考で、前者は「私の作曲した童謡について」という題目において、(童謡の作曲法や楽曲の分析など作品の音楽的概説ではなく) 難しい楽曲にも積極的に取り組み練習を重ねることによって童謡の良さを味わうよう推奨し(『少女號』4月号、1922年、80-81頁)、後者は「音楽の聴き方—そのお部屋、服装、態度の御注意」という題目のとおり、音楽会を開くための部屋、服装、態度等に関する手引きを詳述している(『少女畫報』3月号、1926年、42-54頁)。
- 19) 前掲 註15) 小山、45頁。
- 20) 玉川裕子「近代日本における家庭音楽論—『一家団樂』という未完の夢」『桐朋学園大学研究紀要』第43集、2017年、73頁。
- 21) 周東美材は雑誌『音楽界』(1908年の創刊から1923年の休刊まで)に掲載された「家庭音楽」の関連記事を44件(周東美材「鳴り響く家庭空間」関東社会学会『年報社会学論集』21、2008年、97頁)、歌川光一は婦人雑誌の16誌から音楽(邦楽も含む)と理想的な家族との関係に言及した記事を61件(『婦人之友』も含まれているものの、弘田のこの論考は外れている)、家政・修養書から31件を抽出している(前掲 註1)歌川、72-73、75頁)。
- 22) 青木露湖「家庭音楽と唱歌」『音楽界』12月号、1913年、24頁。
- 23) 弘田龍太郎「家庭と音楽趣味」『婦人之友』7月号、1921年、45頁。
- 24) 細川周平「家庭音楽—団樂にピアノが聞こえ」『近代日本における西洋音楽文化の衝撃と大衆音楽の形成：黒船から終戦まで』(平成11-14年度科学研究費補助金 基盤 (C) (2))、2003年、33-36頁参照。
- 25) 前掲 註21) の周東の調査を参照 (97頁の表1)。
- 26) 山本正夫談「家庭と音楽」『音楽界』6月号、1918年、48頁
- 27) 幸田延子女史談「家庭と音楽」『音楽界』3(10)、1910年、57頁。
- 28) 前掲 註23) 弘田、47頁。
- 29) 弘田龍太郎「音楽を聴く悦び」『婦人之友』6月号、1924年、25頁。
- 30) 同前、26頁。
- 31) 同前、27頁。
- 32) 弘田龍太郎「器樂に就いて」『婦人之友』3月号、1926年、47頁。
- 33) 同前。
- 34) 同前。
- 35) 同前、50頁。
- 36) 弘田龍太郎「幼児の音楽」幼児教育全集 第七卷『幼児の詩・音楽舞踊』刀江書院、1938年、118-119頁。
- 37) 同前、119頁。
- 38) 弘田が行った調査の内容を含め、邦楽調査掛の事業の実態については大久保真利子の「邦楽調査掛による長唄の五線譜化—事業の実態と再評価—」(『日本伝統音楽研究』第9号、2012年、5-19頁)に詳しい。
- 39) 吉川英史『この人なり 宮城道雄傳』新潮社、1962年、225-226頁。
- 40) 弘田龍太郎「民衆の求むる眞の音楽」『婦人之友』5月号、1922年、43頁。
- 41) 同前、44頁。
- 42) 同前、45頁。
- 43) 湯原元一「蔭縁樂話」『音楽界』6月号、1910年、47-48頁参照。
- 44) 拙稿「弘田龍太郎と工場音楽」『中部大学現代教育学部紀要』12号、2020年、69-81頁。

受付日 2020年 9 月 30 日

受理日 2020年 10 月 28 日

Abstract

Hirota Ryutaro, a well-known composer of children's songs, published a number of compositions in various magazines in his time. While the majority of his children's songs were published in girls' magazines, his compositions and a considerable number of theoretical writings can be seen in magazines. In this paper, I discuss Hirota's view of music through his writings that ran in women's magazines prior to the Second World War. Most of Hirota's work was published around 1920, from the Taisho period to the early Showa period. This was also the period that gave birth to the new middle class, primarily in large cities. This new class of people was the primary readership of the women's magazines that published many of Hirota's writings. Consequently, his writings are thought to have been intended to enlighten these women. Arguments that compared Europe, where family music was very common, with Japan, where people seemed to have little taste for music, were commonly seen in the music world at this time. Hirota, who was an archetypical admirer of European high culture of the Taisho period, did not argue for European classical music as a form of entertainment. He instead considered mastering music as a form of "education." His view of music was deeply related to the adoration and inculcation of European classical music by the new middle class.

Keywords: Hirota Ryutaro, Women's Magazines, New Middle Class, Family Music, Blending of Japanese and European Classical Music Styles